

(第5号様式)

学位論文審査の結果の要旨

氏名	Andi Patiware Metaragakusuma
審査委員	主査 胡 柏 副査 遅澤 克也 副査 市川 昌広 副査 武藤 幸雄 副査 中安 章

論文名

An Analysis on the Development of Sago Production and Its Determinants in South Sulawesi, Indonesia

(インドネシア、南スラウェシにおけるサゴ生産の発展およびその影響要因に関する研究)

審査結果の要旨

インドネシアは戦後から一貫してコメの自給達成のために稲作優先政策を推進してきた。しかし、1984年にこのコメ自給が達成されたものの、90年代に入ると慢性的なコメ不足から年間200万トンの輸入に転じている。また、インドネシアの経済発展によりデンプン資源の需要も大幅に拡大し、小麦やタピオカ澱粉の輸入量も増大の一途をたどっている。インドネシア政府は食料安全保障を確保することは、政府と地域社会が直面する最重要課題として位置づけ、地域の食料資源、特にコメ以外の多様な在来の食料資源を使った新たな食糧生産への取り組みが展開しつつある（農業省令：No.43/2009、No.18/2012等）。東部インドネシアの沿岸部を中心に約200万ha分布するサゴヤシは生育に伴ってその幹に良質な澱粉（sago）を蓄積することから一部住民の貴重な食料として利用されてきたが、その大半は未利用資源として位置づけられており、その活用が叫ばれている。東部インドネシアではサゴヤシからカカオなどの他の商品作物への転換が顕著に見られ、サゴ澱粉の生産は逆に減少している現実がある。

本論文は、サゴヤシ生産地域のサゴ澱粉生産を発展させるための要因分析を「サゴ離れ」が顕著に見られる南スラウェシを対象として実施し、東部インドネシアのサゴ生産地域のサゴヤシを利用した地方開発の可能性を検討したものである。

第1章では、インドネシアの食料生産や食料輸入を概観した上で、インドネシア政府による食糧政策の転換を整理し、サゴヤシの食料資源としての可能性をまとめている。第2章ではインドネシアでのサゴヤシの利用の実態を文献ならびにソーシャルメディア等を使った最新の情報からまとめ、インドネシア全国で63種類の伝統的サゴ食品が実在していること、インドネシアの食文化の中にサゴが位置付けられており、サゴ食圏だけではなくインドネシア全体でサゴを使った地場産業を育成する可能性があることを指摘している。

第3章では、研究対象地域である南スラウェシのサゴヤシの位置づけを統計資料等から明らかにし、また、最近のサゴ利用の動向を現地調査から探っている。全体として南スラウェシのサゴ生産は大幅に減少しているが、都市部ではサゴの新たな需要が出現していることを明らかにしている。従来「ねれサ

ゴ」(半乾燥、未精製の状態)でローカルマーケットに出されていたサゴを簡易精製したサゴ粉の普及が見られ、この消費が都市部を中心に確実に増大する傾向が見られること、また、南スラウェシの伝統的なサゴ料理カプルン専門のレストラン出現が州都のマカッサールなどで急速にみられることなどから、今後、サゴの需要は拡大する方向にあると結論し、これらの新しいサゴ需要に対応するためのサゴヤシの植林が実施されることが必要であると指摘している。

コミュニティーレベルの分析(第4章)では、南スラウェシ州北ルウ島の主要なサゴ生産地であるペンカジョアン村とウェラウィ村のサゴ農家54戸に対してサゴ生産にかかわる作業時間、生産量、収入、生産意欲(モチベーション)等の聞き取り調査を実施し、農家のサゴヤシ生産を促進するための要因を検討した。その結果、先行研究で言われているような収入よりもモチベーションの方が大きな要因になっていることが判明している。したがって、農民の生産意欲を高めるためのサゴヤシ栽培の知識(育苗、植栽密度)や栽培管理方法などを具体的に学ぶための研修プログラムを地方政府や地元大学が連携して実施することが必要であると指摘している。

第5章では南スラウェシ州ルウ地方で実施されてきたサゴヤシ開発の様々な試みを総括し、これらの試みに共通して継続性がなかったことを指摘し、第6章では今後のサゴヤシを使った地方開発への提言を行っている。サゴヤシのように移植してから収穫されるまでに10年以上必要とする有用植物を栽培化し、生産管理していくためには小農だけの営為に頼るのではなく、農民レベルのサゴヤシの商品作物化を促進するための産学地連携(ABCG: Academia, Business, Community, Government)が必要であると提言している。

以上のように、本研究はインドネシアの最重要課題となっている食料安全保障に資する地域資源としてのサゴヤシの可能性を明らかにし、サゴヤシを使った地方開発の具体的な提言をしている。研究対象は南スラウェシであったが、この研究の成果は類似のサゴ生産地が分布する東部インドネシア全域に適用可能であることから極めて重要であると評価された。

本論文に関する公開審査会は平成30年2月3日、愛媛大学農学部で開催され、申請者の論文発表と適切な質疑応答が行われた。引き続いて行われた学位論文審査会で本論文の内容を慎重に審査し、全員一致して博士(学術)の学位を授与するに値するものと判定した。